



STYLE UP CAR CONTEST SPECIAL
afimp

SUPER CARNIVAL

2019
SHOP & MAKER BOOTH and more...

令和元年 最強の超大祭 スーパー快晴で開催

5月12日(日)、大阪・舞洲スポーツアイランドで
11年目を迎えた超大祭が青空のもとで開催されました
全国津々浦々から集まったスーパーなスタイルアップカー軍団
この日のために日々是スタイルアップ道に磨きを掛け
丹精込めて、作り上げられたクルマたちは圧巻の一言に尽きます
この日、聖地舞洲に集まってくれたafインプユーザーのみなさま
ひとりひとりに感謝を込めて
まずは、速報レポートお届けします



眩しすぎる見事な スタイルアップカーの 乱舞共演

afimpスーパーカーニバルin 舞洲では
スペシャルなスタコン撮影会や豪華景品がプレゼントされた
じゃんけん大会。毎年恒例のヘリコプターからの空撮、大記念撮影。
そして、協賛メーカー&プロショップが選んだ
afスーパーカーニバル冠賞の発表とエンディングの
スタイルアップカーパレードランまで
快晴笑顔満点で一日、楽しい超大祭でした！



【ボンド大阪賞】
ボルシェ991.2GTS
川崎翔サン

選考のポイントは「どれも大作揃いで目移りしそうな会場内でも、とにかく一番チャラそうで、女性にモテそうだったから」とボンドのツッチーさん。一方の川崎サンもカスタムのセールスポイントを質問されて「チャラそうな感じにしてみました」と好レスポンスで会場を沸かせました。実際、ハイエンド鍛造モデルの1221wheelsを華麗に履きこなしたボルシェは注目度バツグン。ピーカンの舞洲でトクベツな存在感を放っておりました。



【ビレリ四日市賞】
アウディTT
堀庭晃平サン

「すでにカスタムはけっこう進んでいるとは思いますが、この先を期待してしまうカッコよさがありますね。ぜひ次のステップを見てみたいと思わせるところが選考した理由です」とビレリ四日市の山本弘行サン。オーナーの堀庭サンは「前後はけっこうイイ感じで仕上がっていると思うので、これからはサイドビューをイジッていきたい」とのこと。アウディTTのクリーン&カジュアルメイキングに一石を投じるスタイルだ。



【RAYS賞】
BMW M235
大高正輝サン

「これからもカスタマイズの世界を脚元から支えていきたい」と語るレイズの山口サンがセレクトした1台は、26才の若いユーザーがドライブするM235。ホイールアーチにタイトに収まったTE37がセンスフル。「シンプル&ビューティっていうんですかね。BMWらしくていいです」と絶賛。オーナーの大高サンは「ウレシイですっ!」と一言。カタチだけでなく音にもこだわっているということで、今はマフラーを色々と物色中だとか。



文◎嶋津敏一

ユーザー参加のお祭りは
どんどんな輪が広がっていく

※雨降って地固まる。とは、昨年の
超大祭総括のシメのフレーズであ
りました。そして11年目に突入した
afインプスパーカーニバル舞洲
ステージは、そのコトワザ通り始ま
ったのであります。

超大型連休明けの5月12日、突き
抜けるような晴天。やっぱり超大祭
はこうじゃなくっちゃと。

続々とゲートインしてくる
プレイヤーたちの笑顔、笑
顔、笑顔。得も言われぬ感
覚がジワリとココロを満た
していくような、ちよつと
感動モノな気持ちで、しば
し立ち尽くしてしまつた審
査委員長でございます。



【ドルト賞】
BMW Z4
平岩正一サン

ドルトの小森店長が選んだ作品は”赤”が印象的な平岩正一サンのZ4。「とにかく赤のキメ方がうまいですね。すごく色気を感じます。ライト回りを含め、オリジナルのセンスも深いです」とセレクトの理由を語ってくれました。オーナーの平岩さんは「ボディカラーに一目惚れして購入したんです。夜と昼では違う表情の赤を軸に今後はインテリアをさらに進化させていきたいと思っています」と今後のスタイルアップの抱負を教えてくださいました。



【マッキナ賞】
BMW 325
立山紀新サン

ネオクラシーンの中でもなかなかレアなE30をチョイスしたのはマッキナの太田サン。選者のポイントは、「もちろん懐かしさもあったのですが、白くペイントされたBBSですか、キレイに落とされた車高の作り方であるとか、すべてがストレートにツボでした」とディテールまでしっかりと押さえてのセレクト。「マフラーがノーマルだったので、チタンのマフラーエンドを用意しました」と実にマッキナらしいオチをつけて頂きました。



【GYEON JAPAN賞】
VWゴルフGTi
苫原和守サン

「すごいクルマがたくさんいた中で、自分が乗りたい!と感じたのがこのクルマ」とベタ誉めする西川さんが選んだのは、年間スタコンでも上位入賞した経験を持つ苫原和守サンのゴルフII。エンジンをVR6用に換装するなどの超絶進化を果たして再々登場です。「会場入りした朝、手がけてWAXをかけている姿を見かけてホントにクルマが好きなんだと感じました。ぜひうちの次世代型ケミカルを使ってください」と熱い握手を交わしていました。



あるいは、けっこう見慣れていたどカラーの取り回しが強烈に巧いとか。月間のスタコン審査ではけっこう見逃しがちな部分が、立ち位置を変えることで浮かび上がってくる。またしても勉強になるわけだ。

一方で、舞洲セレクトという企画の立ち位置で会場を回るときで見えてくるモノもあります。いわゆる一芸に秀でた作品とでも表現しましょうか。パッツパツのリムセッティングだけでご飯3杯いけちゃいそうな作品とか、ディテールはそれ

で、スタコンの目線で今回の超太祭はどうだったかといえば、さらにカスタマイズのベクトルが全方位的に深まっていたのではないかと。車種的にもそうですが、ジャンルのにも完全無差別級なのです。ほとんどヘンタイかと思うほど作り込まれ、こだわり抜かれた作品があるかと思えば、ほぼツルシなのに何だかセンスフル。これではライターさんが原稿書けないだろうなと思いつつもマルつけちゃう。そんな作品も多々あったりして。

レクトなる企画も背負っております私としては、200台超えの会場を期待感でバンバンに胸膨らませてながら歩き始めと思っていたください。「軽〜い気持ちで8台選んじゃってください」と、いつものノリで編集長タダは言いますが、私、1周目でメモ帳半分使ってしまったからね。



今年も快晴! たっぷり日差しを浴びてサイコーでした みんなの笑顔に感謝です



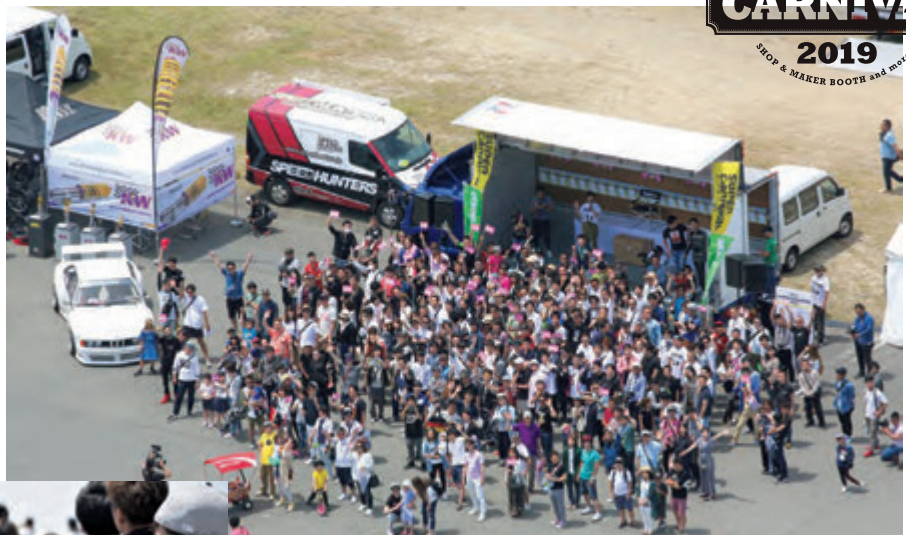
考えてみれば、クルマを真ん中に置いたイベントは、世に数多くあるのです。動員数でいえばもっと規模の大きなイベントもあるかもしれません。でも、中でも超太祭はトクベツな雰囲気があると感じています。それは僕らだけの思い込みではなくて、プロショップやメーカー、ユーザーもそう感じているようです。違いというのは、独特なユルさだったり、イベントっぽくない空気感だったり、実に様々なのですが、では最初からそうだったかなと思いついてみると、ちよつと違う。そうそう、私、皆勤賞ですよ(当たり前前ですが)。いやはや毎年、種々勉強させて頂きました。超太祭、正味、ユーザーさんあつてのイベント。ということを考え合わせれば、スーパーカーニバルというネーミング通り、ユーザー参加のお祭り、だからこそユーザーがこのイベントを成長させてきたのではないかと美しい結論に落ち着きます。

たしかに最初のうちは参加するプレイヤーたちにも力が入っているような様子が窺われたし、僕らもやっぱりそうだったのです。それがいつしか純粹にイベントとして楽しめるようになってきた。偶然隣合わせたユーザーさん同士がスタイルアップ談義に話を咲かせたり、同じクルマに乗っているからこそわかるウンチクを語り合ったり、そこにギャラリィが加わり、どんな輪が広がっていく。こういう流れはここ最近、すごく強くなってきていると感じています。それこそがイベントとしての成熟なのかなと。

さて、例によって今回も、舞洲セ



次号afimp9月号(8月10日発売)で たっぷり一冊、超大祭のすべてを お届けします! ご期待ください!



はずのクルマが、久しぶりに再会してみると意外なインパクトを放っていたりして。思わず『どっかイジッタ?』と聞いてみるんですが、「いや。まんまですよ」と。だからというわけではないのですが、つくづくスタコンは変化ではないんだなと悟りましたよ。「どこをイジりました?」とか「どのパーツを変えました?」とか聞いちゃいけないんだと。いや、もちろん取材はしなくちゃいけないんですけどね。つまり、そういうレベルまで来た作品が増えてきているという実感があるのです。A4アバントの今柴号とか田井中号とかは毎回気持ちに引かかってくるし、同じ意味では柴田シロツコもそう。三野ボーラの前で性懲りもなく立ち止まるというやつです。

ある意味で若いプレーヤーたちにぜひナマで見て欲しい作品がズラリと並んでいるのも超大祭のいいところ。同時に若い世代の作品が刺激的なだけではなく、リアルな存在感をモノにしているのを見ると、「あ、コレって回ってるな」とちょっとウレシクなる審査委員長なのです。

ということで、世界にひとつだけが集まった超大祭。新たなステージへと走り始めましたっ!